

令和元年8月30日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13285

研究課題名(和文)境界地域史への地域情報学活用 サハリン島ミクロ歴史情報データベースの構築と応用

研究課題名(英文)Application of Area Informatics to Borderland History

研究代表者

中山 大将 (NAKAYAMA, Taisho)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・助教

研究者番号：00582834

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：研究者が個々人で作成し所蔵している研究用の資料目録などの活用と共有・公開を進めるために「境界地域史研究資料統合活用計画」を立ち上げ、京都大学地域研究統合情報センター(現・東南アジア地域研究研究所)開発の「Myデータベース」システムを利用し、「サハリン/樺太史研究DB」として複数のデータベースの作成と公開を行なった。また公開はしていないものの、サハリン残留日本人関連資料の整理も行ない、その成果は『サハリン残留日本人と戦後日本』(国際書院、2019年)として出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「境界地域史研究資料統合活用計画」では現在「サハリン/樺太史研究DB」のみが公開されているが、同様の方法で他地域のDBについても作成・公開していく予定である。本科研は研究者個々人の作成した資料目録などの収集・整理・公開・共有の仕組み作り成功した。また「樺太地理情報DB」や「サハリン/樺太史研究DB」も今後多言語対応を行なっていく予定であり、研究の基礎情報・資料・成果の国際的共有と活用が期待される。また、『サハリン残留日本人と戦後日本』(国際書院、2019年)はサハリン残留日本人を総体的研究しただけではなく、数量的に検討し、かつ「境界地域史」概念を理論的検証を行なった研究として意義がある。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to share and open lists of research materials made by each researcher. Therefore, this project gathered such lists from other researchers and built up and opened “Database of Sakhalin/Karafuto historical Studies” on “My date base” system invented by CIAS (Today: CSEAS), Kyoto University. (you can access it here: <https://nakayamataisho.wordpress.com/borderlandsdb/sakhalinkarafutodb/>)

In addition, this project collected public and private documents on remaining Japanese in Sakhalin. One of the most important academic outcome was a book, NAKAYAMA Taisho, Remaining Japanese in Sakhalin and Post-war Japan: Post-war History in the Japan-Soviet Borderland (Tokyo: Kokusai Shoin, 2019). (you can see the English summary here: <https://nakayamataisho.wordpress.com/english-2/summary-1-2/>)

研究分野：日本史

キーワード：サハリン 樺太 境界地域 データベース 移民

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、日本帝国植民地樺太の移民社会形成史研究から研究生活を始め『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成』(京都大学学術出版会、2014年)を上梓したほか、その解体史研究としてサハリン残留日本人問題研究を行い「サハリン残留日本人」(蘭信三編著『帝国以後の人の移動』勉誠出版、2013年)などの成果を発表してきた。国外で勃興しているサハリン島史、台湾島史という地域史研究は大国に挟まれ幾度となく境界が変動したこれら地域の歴史的特殊性を前提にしている点で先進的であるが、特殊性を強調し普遍性を軽視する郷土史的な傾向を持ちかねないものでもある。

そこで、応募者はこうした近現代において境界変動を幾度となく経験した地域を「境界地域」と位置づけ、「境界地域史研究」という枠組みを提唱するに至った。研究代表者が所属する京都大学地域研究統合情報センター(研究開始当時、現・東南アジア地域研究研究所)では地域研究と情報学の融合(地域情報学)を図っている。枠組みだけでなく、手法としても「境界地域史研究」という新たな研究分野を確立することを目的とし、統計、現地メディア、政策文書、回想記、民間団体文書などを材料に、「サハリン島境界地域史研究ミクロ歴史情報データ・ベース」の構築を試みたのが本研究である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、境界変動(国境や軍事境界線など)による地点ごとの変化の分類と境界変動による人物の経験の分類を実証的に行い、境界変動とそれに伴う社会変動の具体的なプロセスを多角的に明らかにすることである。本研究の背景としては、民族や国家を主語とした従来の歴史研究の閉塞を打ち破るための方法のひとつとして、近現代において幾度となく境界変動を経験した「境界地域」と位置づけ、新たな「境界地域史研究」という枠組みを確立することが求められていることがある。そのために、1945年のサハリン島における境界変動を具体事例として、様々な歴史資料を活用するための「サハリン島境界地域史研究ミクロ歴史情報データ・ベース」を構築・利用することで手法的革新を目指しながら研究を行う。

3. 研究の方法

本研究では、メイン・プロジェクトに先立ち、パイロット・プロジェクトとしてサハリン残留日本人に関する名簿や各種資料を統合した「サハリン残留日本人歴史情報データ・ベース」の構築を行う。メイン・プロジェクトとして「サハリン島史ミクロ歴史情報データ・ベース」の構築を行う。関連資料(統計、公私文書、メディア、回想記)の選定、デジタル化(画像データ化)、テキスト・データ化という過程を経てデータ・ベースを構築する。各データは、地点・時点情報からの検索が可能であり、境界変動前後での各地点における変化(人口やその構成、社会状況、戦闘時の現象など)を把握し、その変化を分類することで境界変動とそれに伴う社会変動の具体的なプロセスを多角的に明らかにすることができる。

4. 研究成果

(1) 中山大将『サハリン残留日本人と戦後日本』(国際書院、2019年)

本書は、パイロット・プロジェクトの成果と言える。サハリン残留日本人について数量的に把握した初の研究であるだけでなく、研究書としてはサハリン残留日本人の全体像を明らかにした初の学術書となる。また、本研究の根本となる「境界地域史」という研究枠組みについても同書で章を割いて検討を加えている。

本書では、サハリン残留日本人を日本人引揚者、残留朝鮮人の2つの集団と比較することで、(a)日本人引揚者の中にはサハリンへの帰還権を求める声は起きず領土返還のみが要求され、冷戦期、ポスト冷戦期双方における残留日本人や残留朝鮮人の永住帰国が必ずしも離散家族家庭への再統合や出身地への帰還を意味せずあくまで地理空間としての「故郷」ではなく生活空間としての「祖国」での居住実現が優先されたことが示すように、境界変動によって元住民は、退去者(広義の引揚者)も残留者も「祖国」の一部としての「故郷」を喪失したと言えること、(b)残留は再境界化過程(1945年8月~49年7月)における退去(引揚げ)の不徹底によって発生し、跨境化過程(1949年7月以降)における境界の透過性の低位状態によって継続し、境界変動以前の生活圏との分断が発生すること、(c)ただし、残留の継続をもたらすのは前記の透過性の低位状態のような国際的なマクロレベルの要因だけではなく、本人の生活不安や離散家族と現在の家族の双方の意向などの私的なミクロレベルの要因も重大な要素であること、を明らかにした。

(2) サハリンノ樺太史研究DB(境界地域史研究資料統合活用計画)

メイン・プロジェクトの成果として、「サハリンノ樺太史研究DB」の作成と公開が挙げられる。従来、歴史資料のデータベース化と言えば巨額を投じ大部分を業者に依存するという形態が主流であった。しかし、本プロジェクトでは、京都大学地域研究統合情報センターが開発した「Myデータベース」システムを利用し、研究代表者自身がデータベースの設計やアップロード、カスタマイズを行っており、技術的に業者に委託した部分は完全に皆無である。さらに、データも、新たにデータ化作業を委託するのではなく、個々の研究者が自身の研究のために作成し個人で所蔵していた目録などを提供してもらうことで、データ作りのための費用も大幅に低コスト化が実現した。つまり、歴史研究者自身が低コストで、なおかつ他の研究者と連携しながら、過去

に作成したまま未公開である資料の目録などを検索可能なデータベースとしてネット上にアップしていく仕組み（境界地域史研究資料統合活用計画）を作り上げることに成功した。

現在公開中の主要なデータベースは以下の通りである。

(a)サハリン/樺太史研究文献 DB

サハリン/樺太史研究に関する研究文献を検索できる。日本語文献は主に 2008 年以降に発表されたものが中心である。収録文献数は現在 528 件。

(b) 樺太地理情報 DB

樺太の地名（地点）の位置（緯度経度情報）、現地名などを検索できる。現在、検索可能な地点の種類は「市街地・集落」のみである。収録地点数は 783 で、収録現地名数は 137 である。

(c)樺太日日新聞 DB

樺太で発行されていた現地紙『樺太日日新聞』掲載記事について、各研究者が自分の研究関心に沿って作成した記事目録の DB 化。基本的に、「記事名」、「掲載年月日」、関連する「地名」は検索・閲覧可能ですが、「執筆者」、「面番」、「本文」の検索・閲覧の可否は DB や記事により異なる。記事の「画像」については、境界地域史研究資料統合活用計画推進協議会のメンバーのみ閲覧可能である。具体的には以下のものを公開中である。

樺太日日新聞 DB 農業編

樺太日日新聞 DB 農業編画像公開版

樺太日日新聞 DB アイヌ犬橋編

樺太日日新聞 DB 漁業編

樺太日日新聞 DB 漁業編画像公開版

樺太日日新聞 DB 観光編

樺太日日新聞 DB 中川小十郎巡視編

樺太日日新聞 DB 中川小十郎巡視編画像公開版

(3)その他の成果

メイン・プロジェクトの研究過程で生まれた研究成果として主に以下の査読学会誌論文が挙げられる。

(a)中山大将「樺太のエスニック・マイノリティと農林資源：日本領サハリン島南部多数エスニック社会の農業社会史研究」『北海道・東北史研究』第 11 号、2018 年。

(b)中山大将「台湾と樺太における日本帝国外地農業試験研究機関の比較研究」『日本台湾学会報』第 20 号、2018 年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

中山大将、中華民国および中華人民共和国におけるサハリン樺太史研究：台湾と大陸における庫頁島中国固有領土論の系譜、近現代東北アジア地域史研究会 News Letter、無査読、29 号、2017、13-22

中山大将、竹野学、木村由美、ブル ジョナサン、パイチャゼ スヴェトラナ、サハリン樺太史研究会第 41 回例会 樺太の 戦後 史研究の到達点と課題、北海道・東北史研究、無査読、11 号、2018、108-119

中山大将、台湾と樺太における日本帝国外地農業試験研究機関の比較研究、日本台湾学会報、有査読、20 号、2018 年、45-66

中山大将、樺太のエスニック・マイノリティと農林資源：日本領サハリン島南部多数エスニック社会の農業社会史研究、北海道・東北史研究、有査読、11 号、2018、77-90

〔学会発表〕(計 9 件)

中山大将、亜熱帯植民地台湾と亜寒帯植民地樺太の農業試験研究機関：境界地域史の観点からの比較、日本台湾学会第 18 回学術大会第 6 分科会、宇都宮大学峰キャンパス、2016 年 5 月 21 日

中山大将、樺太および台湾の農業試験研究機関の活動から見る日本帝国外地の近代化、近現代東北アジア地域史研究会第 26 回研究大会シンポジウム「農業技術の近代化と植民地支配：在地社会と帝国の闘い」、日本大学文理学部、2016 年 12 月 3 日

中山大将、近現代東アジア史における境界地域史研究の可能性、GJS 若手ワークショップ 2016 「東アジア歴史学において日本史学が果たす役割」(主催：東京大学国際総合日本学ネットワーク) 東京大学東洋文化研究所、2016 年 12 月 25 日

中山大将、近現代東アジア境界地域における残留現象の比較相関研究、日本移民学会第 27 回年次大会自由論題報告、東洋大学白山キャンパス、2017 年 6 月 25 日

中山大将、東アジアにおける境界変動と人口移動の中の日本人引揚げの位置、日本移民学会第 27 回年次大会パネル報告「引揚げの可能性を探る：今泉裕美子ほか編(2016)」『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究』を手掛かりに、東洋大学白山キャンパス、2017 年 6 月 25 日

NAKAYAMA Taisho, Forestry and Agriculture in Subarctic Colony Karafuto (Southern Sakhalin), international Workshop on “Empire Forestry Networks and Knowledge Production,” JSPS Kakenhi Grant Number 17K01178: Grant-in-Aid for Scientific Research (C) ‘Decolonization of Indian Forestry and Reconfiguration of Empire Forestry Networks’

(represented by Shoko Mizuno, Komazawa University), and JSPS Kakenhi Grant Number 18H00642: Grant-in-Aid for Scientific Research (B) 'Study on the development of knowledge and practices of empire forestry' (represented by Koji Nakashima, Kanazawa University), the Association for East Asia Environmental History Japan, Komazawa University, 24th of November 2018

中山大將、中国語圏におけるサハリン樺太史研究：庫頁島中国固有領土論・山丹貿易・日本帝国植民地、サハリン樺太史研究会 10 周年シンポジウム「世界におけるサハリン樺太史研究」サハリン樺太史研究会、科学研究費補助金基盤研究(A)「日ソ戦争および戦後の引揚・抑留に関する総合的研究」、学術研究助成基金助成金(挑戦的萌芽研究)「境界地域史への地域情報学活用：サハリン島ミクロ歴史情報データベースの構築と応用」、北海道大学、2018 年 12 月 1 日。

中山大將、サハリンノ樺太史研究 DB(データベース)について：個人作成資料目録の統合と活用、サハリン樺太史研究会 10 周年シンポジウム「世界におけるサハリン樺太史研究、サハリン樺太史研究会、科学研究費補助金基盤研究(A)「日ソ戦争および戦後の引揚・抑留に関する総合的研究」、学術研究助成基金助成金(挑戦的萌芽研究)「境界地域史への地域情報学活用：サハリン島ミクロ歴史情報データベースの構築と応用」、北海道大学、2018 年 12 月 1 日

中山大將、境界地域史研究資料統合活用計画：研究者個々人が作成した未公開の資料目録の活用に向けて、第 28 回近現代東北アジア地域史研究会大会個別報告、近畿大学、2018 年 12 月 8 日

〔図書〕(計 9 件)

中山大將、もうひとつの「帰国者」：サハリンから日本へ、駒井洋監修、佐々木てる編著、移民・ディアスポラ研究 5 マルチ・エスニック・ジャパニーズ：系日本人の変革力、明石書店、2016、231-235

福谷彬・巫覡・中山大將編著、京都大学アジア研究教育ユニット報告書 11 2015 年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ報告論文集、京都大学アジア研究教育ユニット、2016、229

中山大將、森と共に生きる人びと、一九一五～二四年、原暉之、天野尚樹編著『樺太四〇年の歴史：四〇万人の故郷、全国樺太連盟、2017、116-156

中山大將、樺太開発の新展開、原暉之、天野尚樹編著、樺太四〇年の歴史：四〇万人の故郷、全国樺太連盟、2017、241-265

中山大將、離散をつなぎなおす：なぜサハリン残留日本人は帰国できたのか、秋津元輝・渡邊拓也 編著、変容する親密圏／公共圏 12 せめぎ合う親密と公共：中間圏というアリーナ、京都大学学術出版会、2017、163-189

中山大將、樺太の中国人、華僑華人の事典編集委員会編、華僑華人の事典、丸善出版、2017、232-233

中山大將、なぜ 数 を問うのか？、浅野豊美、小倉紀蔵、西成彦編著、対話のために：「帝国の慰安婦」という問いをひらく、クレイン、2017、59-87

中山大將、(中山大將)、
()、
>、
<

中山大將、サハリン残留日本人と戦後日本：樺太住民の境界地域史、国際書院、2019、389

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

中山大将の研究紹介

<https://nakayamataisho.wordpress.com/>

境界地域史研究資料統合活用計画

<https://nakayamataisho.wordpress.com/borderlandsdb/>

境界地域史研究資料統合活用計画推進協議会

https://nakayamataisho.wordpress.com/borderlandsdb/a_bldb/

サハリン / 樺太史研究 DB

<https://nakayamataisho.wordpress.com/borderlandsdb/sakhalinkarafutodb/>

サハリン / 樺太史研究文献 DB

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311karafutoHIS2

樺太地理情報 DB

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311karafutoMAP2

樺太日日新聞 DB 農業編

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc1001AGRI

樺太日日新聞 DB 農業編画像公開版

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc0001AGRI

樺太日日新聞 DB アイヌ犬橇編

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc1002SLED

樺太日日新聞 DB 漁業編

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc1003FISH

樺太日日新聞 DB 漁業編画像公開版

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc0003FISH

樺太日日新聞 DB 観光編

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc1004SIGH

樺太日日新聞 DB 中川小十郎巡視編

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc1005NKGW

樺太日日新聞 DB 中川小十郎巡視編画像公開版

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc0005NKGW

中山大将「サハリン・樺太から見る東アジアの150年：国境と国民の時代の境界地域」京都大学研究連携基盤京都大学丸の内セミナー第90回、京都大学東京オフィス、2018年1月12日

<https://www.youtube.com/watch?v=5rm8vlyA26g>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。